福岡教育大学紀要，第73号，第４分冊，221－236（2024）

特別な支援を要する学生への長期間の継続したキャリア教育の一事例
―発達障害のある学生の小・中・高・大学の 16 年間を通して―

A longitudinal case study of continuous career support education for a student with special needs

樋　口　陽　子　　中　山　　健

Yoko HIGUCHI　　Takeshi NAKAYAMA

一般社団法人
キャリアサポートクラブ

教職実践研究ユニット

（令和５年９月28日受付，令和５年12月22日受理）

通常の学級に在籍する発達障害のある学生に対し，支援機関として関わり，小・中・高・大学の 16 年間を通してキャリア支援を行った。卒業後を見通して支援方針や支援計画を立て，義務教育終了後も継続して関わることで，本人が自信と見通しを持てるようになり，キャリア形成が進んだ。アセスメントに基づき自己理解が進み，移行期の情報共有によって必要な配慮や支援が引き継がれた。多様な仕事体験や社会体験と振り返りにより，キャリア形成と自発的な関係作りが進み，自己実現が育まれた。

キーワード：キャリア教育　アセスメント　キャリア形成　自己実現　特別支援教育

Ⅰ　はじめに

少子化，生産年齢人口の減少，グローバル化の進展等，社会構造や雇用環境が大きく，急速に変化する中で，児童生徒が主体的に社会の変化に向き合い，よりよい社会と幸福な人生を切り拓くことができるよう，生きる力を育むことが目指されている。

「キャリア教育」という用語が文部科学行政関連の審議会報告等で初めて登場したのは，平成 11 年（1999 年）12 月の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育の接続の改善について」においてで，「学校教育と職業生活との接続」の改善を図るために，小学校段階から発達段階に応じてキャリア教育を推進する必要があると提言された。その後，様々なキャリア教育推進施策が展開され，平成 23 年（2011 年）１月の中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」では，幼児期から高等教育までを通したキャリア教育・職業教育の在り方がまとめられた。さらに，平成 29 年・30 年改訂の小学校・中学校・高等学校学習指導要領では，総則で「児童生徒が学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら，社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身につけていくことができるよう，特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて，キャリア教育の充実を図ること」と明記された。さらに，特別活動の章において内容に「一人一人のキャリア形成と自己実現」を挙げ，「学習の見通しを立て，振り返ること」が述べられている。

令和５年（2023 年）３月の文部科学省の中学校・高等学校キャリア教育の手引きにおいては，学びのプロセスを記述し振り返ることのできるツールとして「キャリア・パスポート」が令和２年４月より，全国の小・中・高等学校で活用されていると示されている。このようにキャリア教育の明示，中核となる時間や活動，学びのプロセスを振り返るツールが示され，小学校段階からの継

続的な実践が始まったところである。

一方，特別な支援を要する児童生徒に対するキャリア教育として，国立特別支援教育総合研究所は，平成20年（2008年）3月に「知的障害者の確かな就労を実現するための指導内容・方法に関する研究」報告書の中で，知的障害教育におけるキャリア教育の充実を図ることを目的とした知的障害のある児童生徒の「キャリア発達段階・内容表（試案）」を作成した。これは，特別支援学校（知的障害）や知的障害特別支援学級等に在籍する児童生徒の小学部段階からの一貫性，系統性のあるキャリア教育を推進するための枠組みを意識したものであった。ライフキャリアの視点から2010年に改訂され，「特別支援教育におけるキャリア教育の意義と知的障害のある児童生徒の『キャリアプランニング・マトリックス（試案）』作成の経緯」が提案された（2011）。この中で，キャリア教育の位置付け及び評価は，各教科，道徳，特別活動，自立活動，総合的な学習の時間に加えて，児童生徒の「時間軸」，「空間軸」におけるキャリア発達の評価を個別の教育支援計画においても行うことが必要となると述べられ，児童生徒のキャリア発達を促すという側面と，そのために学校，地域，社会側をより適切な環境として見直し，改案する重要性について提言された。知的障害特別支援学校に勤務していた第一筆者は，上記の研究に参加し，小学部の時から職員がキャリア教育の継続性・系統性を意識し，「児童生徒に達成感を持たせ，自信を育てる」授業作りや日常の関わりを行い，中学校・高校につなぐこと，指導内容や経過を保護者に伝え，家庭と連携して取り組むことの重要性を明らかにした。

加えて，樋口・納富（2010）において，特別支援学校高等部から一般就労した自閉症生徒4事例を対象に，自閉症生徒の実態把握に基づく特性に応じた就労支援の在り方を検討した。その結果，アセスメントに基づく特性理解，本人・保護者と学校の課題の共有，自閉症特性に応じた自立活動や進路学習，産業現場等における実習等の支援内容や方法，個別の教育支援計画の引き継ぎが重要であることが明らかになった。

このように，特別な支援を要する児童生徒に対するキャリア教育は，通常の学級におけるキャリア教育に比べ，系統性や継続性を含めた先行研究や個々の状態や特性に応じ，地域や社会と取り組んだ実践事例が多く，通常の学級に在籍する特別な支援を要する児童生徒に活かすことのできる点があるだろう。

また，特別な支援を要する児童生徒に対するキャリア教育の取り組みは，民間の支援機関における通常の学級に在籍する利用者への支援にも，参考にして活用できる点がある。支援機関は，本人や保護者の希望により，幼児期から高等教育後まで継続して本人・保護者・在籍機関等と関わりながら，個に応じたキャリア支援を行うことができるからである。

そこで本研究では，通常の学級に在籍し，小学生から大学生まで支援機関を利用した発達障害のある学生を対象に，先行研究で効果のあった取り組みを活かしながらキャリア支援を行った事例を通して，特別な支援を要する学生のキャリア形成と自己実現を育むキャリア教育の取り組みについて，検討することを目的とした。なお「自己実現」についての定義は書かれていないため，学習指導要領の前文に記された「自分のよさや可能性の認識」「多様な人々との協働」「豊かな人生を切り拓く」をキーワードに，自己理解を高め，周囲の人とコミュニケーションを図り，理解や配慮を得ながら自分の力を社会に役立てること，とした。

Ⅱ　方法

1. 支援機関の概要

第一筆者が所属するキャリアサポートクラブは，コミュニケーションや対人関係を円滑に処理することが困難な中学生以上の学生で，社会参加や就労に向けて積極的に取り組む意欲のある者を支援し，自立のための健全な育成をはかることを目的とする一般社団法人である。目的達成のために次の内容に取り組んでいる。

・集団活動を通した，社会参加に必要な力や仲間意識の育成
・企業等と連携した就労体験の機会の提供
・保護者及び本人との面談による，家庭や学校生活に関する情報収集
・保護者の支援及び保護者同士の繋がり作りの支援
・地域社会の様々な年代の人との交流の促進

具体的には，年度初めに個人懇談を行い，本人・保護者のニーズを把握した上で，本人の取り組みたい活動と社会体験活動を組み合わせ，年間計画を立てて活動している。社会体験活動では地域の市民センターや企業等と連携し，将来の進路選択に向けて仕事体験を取り入れ，自己理解を深める活動を行っている。

2. 事例の概要：TUBASA さん

1）生育歴・教育歴

本論文執筆時，大学4年生である。一部上場企業（製造業）に障害者雇用枠で内定している。

TUBASA さんは，極低出生体重児で生まれ，慢性肺疾患と未熟児網膜症で両眼光凝固療法のため，NICU に2ヶ月程入院した。

2歳半に保育所に入所したが，なじみにくく泣き続けることが多かった。また，風邪などが治りにくく長期重症化しやすかったため，欠席も多かった。2歳の終わりに医療機関で「自閉症傾向」を指摘され，就学前まで作業療法と言語訓練を受け，5歳で「広汎性発達障害」の診断を受けた。未熟児網膜症があるので眼球への衝撃を防ぐため，眼科医の指導の下，高校生まで球技等の際にはゴーグルを着用していた。眼科を定期受診し，眼鏡の適合状態，近視，乱視，視野狭窄等の経過観察を続けていた。小児科で総合的な経過観察を続けたが，健康状態は良好であった。

TUBASA さんの小学校入学前の就学相談を第一筆者が担当し，特別支援学校のセンター的機能や主宰する発達障害等の親子支援の会で関わり始め，その後，支援機関として継続して16年間関わった。

支援開始時の TUBASA さんの主訴は，コミュニケーションが苦手で，自分の気持ちや困っていること，分からないこと等を相手にうまく伝えられないこと，直接的でない表現や想像を要する話の理解が難しいこと，近視，乱視，視野狭窄のため絵や書字が苦手であるということであった。

TUBASA さんは，小学校と中学校の入学前に就学相談を受けたが，いずれも「通常の学級で留意した指導が望ましい」と答申が出され，小学校，中学校とも通常の学級に在籍し，通級による指導も受けたことはなかった。高等学校では進学コースに在籍し，大学では文系の学部で学んでいた。

2）アセスメントの結果

16年間の関わりの中で，その時々の必要性や保護者からの求めに応じて，アセスメントを行った。いずれも第一筆者が検査を実施し，第二筆者に相談し，分析と結果の解釈を行った。

(1) 中学1年時の DN-CAS の結果

学習に苦戦しているとの相談を受け，生活年齢12歳6ヶ月時に実施した結果，全検査標準得点は88（90％信頼区間以下同じ83-94）で，分類カテゴリーは「平均の下」であった。PASS 尺度標準得点は，プランニングが74（69-85）で分類カテゴリーは「平均より低い」，同時処理が80（75-89）で「平均の下」，注意が102（93-110）で「平均」，継次処理が106（98-113）で「平均」であった。PASS 平均に比べて，注意と継次処理が有意に高く，プランニングと同時処理は，有意に低かった。結果から認知の偏りが大きいことが明らかとなった。

プランニングと同時処理が有意に低いが，これらは全て視覚情報に支えられた課題であり，特に見たことを認識する際に妨害刺激が入る「系列つなぎ」，「図形の記憶」は，混乱しやすかった。見ることに集中して書く「文字の変換」は，正確であるが時間を要するうえ，方略を考える余裕がないため半分もできなかった。見る課題でも，選択肢が示されてその中から選ぶ課題になると，見る負荷が減るようであった。見ることの負荷を減らす，つまり少しでも見やすい環境や支援の工夫を要請することが必要であった。また，プランニングの弱さがあるため，取り組む際の方略について，選択肢を出してその中から選びながら考えることを教えていく必要があった。注意と継次処理が有意に高いことから，注意の集中は高く，聞いた情報を覚えて整理する力は高いことが明らかとなった。聴覚情報を活用する学習方法や支援の在り方を工夫していくことが望まれた。

(2) 中学3年時の WISC-Ⅳの結果

保護者から「今後の進路や受験に向け全般的な知能を知りたい」との要望があり，14歳5ヶ月時に実施した。全検査 IQ（FSIQ）が97（90％信頼区間以下同じ92-102）であった。言語理解指標（VCI）が117（108-122），知覚推理指標（PRI）が80（75-89），ワーキングメモリー指標（WMI）が103（96-109），処理速度指標（PSI）が88（82-98），全体的な知的発達水準は平均であるが，言語理解と知覚推理・ワーキクングメモリー・処理速度，ワーキクングメモリーと知覚推理・処理速度の間に有意差があるので慎重な解釈を要した。認知面，認知プロセス等の特徴として，言語理解は他の指標に比べ有意かつ顕著に高く，知覚推理はワーキングメモリーに比べ有意かつ顕著に低かった。WISC-Ⅳの検査結果は，DN-CAS と同様に認知の偏り，特に視覚認知の弱さ，言語理解やワーキングメモリー，聴覚情報活用の強さが明らかになった。また，全般的知能は平均の範囲内にあることも明らかになった。

(3) 高校1年時の K-ABC Ⅱの結果

高等学校1年の終わりから成績が下がり始め，TUBASA さんは学習の難しさを感じるようにな

り，保護者から「本人に，無理をさせているのではないか。このまま取り組んで良いか」と相談があった。現在の学習の習得度を調べ，今後のTUBASAさん自身の取り組みや必要な支援を明らかにするため16歳1ヶ月時に実施した。認知総合尺度は74（90％信頼区間以下同じ69-80），習得度総合水準は103（99-107）であり，全般的な知的水準は非常に低い～平均の下の範囲にあるものの，基礎学力は平均の範囲にあった。認知尺度においては計画尺度84（76-94），学習尺度73（66-82），同時尺度63（57-73），継次尺度100（94-106）であった。同時尺度が他の尺度に比べ有意に低く，継次尺度が他の尺度に比べ有意に高かった。計画尺度が継次尺度に比べ有意に低いことから，課題を解決するための適切な方法の選択・決定・実行，そしてその実行が適切に行われているかチェックする力が有意に弱かった。

習得尺度の結果は，読み尺度96（90-102），語彙尺度105（99-111），算数尺度109（104-114），書き尺度99（91-107）で，個人間差も個人内差も有意差はなかった。認知総合尺度と習得総合尺度の差は大きく，認知尺度の各尺度の結果は，これまでのDN-CASやWISC-Ⅳの結果と同じ傾向で，尺度間に有意かつ顕著な差があった。しかし，習得度は平均の力があり尺度間の差があまり大きくないため，学習の習得はできており，TUBASAさんの苦労が指導者には分かりづらく，見過ごされがちであると思われた。

3）インタビューの実施方法

本論文の執筆にあたり，当事者であるTUBASAさん，保護者に研究の趣旨を説明し，これまでのキャリア教育の取り組みを振り返ってもらい，インタビューを実施した。

TUBASAさんにインタビューした内容は，大学生活で自分自身が行った工夫や対応，就職活動やインターンシップで行った配慮申請や困ったこと，精神保健福祉手帳を取得して障害者雇用を受けることを決めた理由と経緯，希望企業の内定を得るまでに自分で取り組んだこと，就職に向けた現在の気持ちと今後に向けて必要と思うことであった。また，保護者にインタビューした内容は，節目で感じた成長や不安，周囲の支援を得るために行ったこと，振り返って特に良かったと思うことと，こんな支援があればもっと良かったと思うこと，学校教育や企業，社会全体に対して求めることであった。

Ⅲ　取り組みの経過

1. 卒業後を見通した支援方針，支援計画

特別支援学校におけるキャリア教育での学びを活かし，TUBASAさんの卒業後を見通したキャリア形成と自己実現を育むため，次の支援方針をたてた。

①達成感を持たせ，自信を育てる活動を重視する。

②支援内容や経過を保護者に伝え，家庭と連携して取り組む。

③アセスメントに基づく特性理解を本人・保護者にすすめ，学校と課題を共有する。

④特性に応じたコミュニケーションや集団参加の課題について，自立活動のエッセンスを取り入れた活動内容や支援方法で取り組む。

⑤進路学習や産業現場等における実習のような多様な社会体験を中学校以降で計画的に実施し，見通しと振り返りが自分でできるようにする。

⑥個別の支援計画を保護者と作成し，保護者や本人を介して学校に引き継ぐようにする。

これらを通してTUBASAさんのコミュニケーション力および，自己理解と必要な配慮を求める力を育成したいと考えた。なお，上記の①，④，⑤については，異年齢の小集団での活動を計画した。

2. 就学前から小学生の時期の取り組み経過

1）支援方針・支援計画

上記の①達成感を持たせ，自信を育てる活動の重視，②支援内容や経過を保護者と共有し，保育所や学校や家庭と連携した取り組みを行った。

2）支援の経過

TUBASAさんは，5歳時の就学相談において知的発達が通常の範囲にあることが分かったものの，コミュニケーションや集団参加，学習面等，通常の学級での生活に配慮と支援の必要性があった。そこで，第一筆者が保護者や保育所担任とともに就学後の困難点を予測した。一斉指示だけでは行動できない，新しい環境に慣れにくい，板書を写せない，準備・片付けや用具の使用の苦手等があげられた。それらをふまえて，小学校への移行支援計画を立て，月1回の教育相談と家庭学習に取り組んだ。移行をスムーズにするため，保護者や保育所とともにプロフィールブックを作成し，入学前に保護者・本人とともに小学校に訪問し，管理職にTUBASAさんの実態と必要な配慮について伝えた。学校の配慮により適切な指導を受け，安定した学校生活をスタートすることができた。小学校中学年まで特別支援学校のセンター

的機能を活用し，月１回の来校相談で苦手な目と手の協応動作を中心に個別の支援を行った。第一筆者の異動後も継続した支援が実施され，年１回程度，担当者が小学校を訪問し，授業の様子を参観し，担任と情報交換や必要な支援について協議した。学校の理解と対応，TUBASA さんの意欲と保護者の支えもあり，同じようなタイプの友だちができ，不適応など学校生活上の課題は生じなかった。

小学校６年生時に中学進学に向けた就学相談を受け，中学校でも引き続き「通常の学級で留意」した指導が望ましいとの答申であった。

3. 中学生の時期の取り組み経過

1）支援方針・支援計画

中学校入学時にキャリアサポートクラブでの活動を開始した。TUBASA さんの学習上の課題に対して，アセスメントに基づく特性理解を本人・保護者に勧めた。その結果を学校と共有し，具体的な支援や配慮を保護者や TUBASA さん自身が要請すること，キャリアサポートクラブで行う社会体験活動の参加を通して，コミュニケーションや集団参加スキルを高めるとともに，達成感を持たせ，自信を育てるように支援することを方針とした。

キャリアサポートクラブでの活動に参加し，安心できる大人や自分と似たタイプの生徒がいる異年齢の小集団での体験活動をする中で，コミュニケーションや集団参加の苦手さを軽減したいと考えた。達成感を味わい自信をもつことのできる社会体験を計画的に実施し，TUBASA さんが見通しを持ち，振り返りができるようにすることを支援目標とした。

保護者と相談し第一筆者が助言をしながら，中学校にとって分かりやすいプロフィールブックを作成してもらい，入学前，高等学校入学前，大学入学前と常に，保護者から学校に連絡して日程設定の上，特性理解と合理的配慮を依頼するようにした。また必要に応じて，保護者や TUBASA さん自身が学校と相談して，学年途中でも関係者会議を持ってもらえるようにした。

2）支援の経過

(1) 学習面での課題に関する学校との共通理解と学習の取り組み

入学時に保護者によるプロフィールブックに基づいた特性説明と配慮を学校側に行ったが，１年生の１学期から学習や定期試験に苦戦し相談を受けた。テストやノートを見せてもらった上で DN-CAS を実施した。１学期の試験問題や解答用紙，成績等を見ると，教科によって図やグラフが細かく，問題用紙に隙間が少なく配置されていたり，印刷濃度が薄かったりして，本人には見えづらいものがあった。また，小学校と異なり解答用紙が問題用紙と別であるため解答欄を間違えたり，狭い余白に計算して計算を間違えたりしている等のケアレスミスも多かった。成績は５教科では全体の中位より少し下，９教科では全体の３分の２程度の下の位置で，美術，技術が苦手であった。DN-CAS の検査結果と学校の試験問題や成績等と見比べ，第一筆者と第二筆者で検査から分かることと対応策を検討し，TUBASA さんと保護者に説明した。両者とも納得し，検査結果と分析，対応策の文書を見せて学校に伝えたいと言われた。

８月初めに，両親が学校に依頼し，管理職，学年主任，担任と話し合いの場を設け，検査結果と本人の特性，今後求める対応について協議した。学校側は本人が一生懸命学習に取り組む様子は理解していたが，視覚認知の弱さは分からなかったことを認め，「彼が分かりやすいと言うことは，みんなにも分かりやすいと言うことですから」と，学年全体でのプリントや提示方法について，各教科の先生に伝えて２学期からの配慮を約束してくださった。家庭でも必要な場合は拡大コピーして学習するようになった。

２学期から学校での具体的な配慮が始まり，試験問題は余白が多く，図やグラフ等の配置もすっきり見やすく，問題の解答欄も分かりやすいものとなった。その上で，本人に必要なものは拡大してくださり，授業中の板書も数教科において，全員に板書ノートを準備し，それを貼る A4 サイズのノートの購入を勧め，（　）穴埋めや余白への書き込み等で学習を進めるようになった。TUBASA さんが卒業するまで支援は続き，中学校での学習で困ることはその都度，本人が解決できるようになった。学校の配慮に加え，本人の努力もあり成績は中の上程度で推移した。

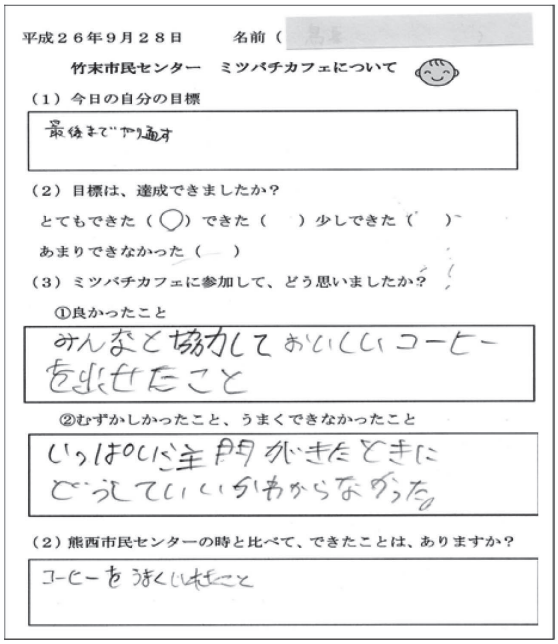
(2) キャリアサポートクラブでの活動と支援の経過

TUBASA さんが中学２年生の時の年間活動内容を表１に示した。個人懇談で聞いた本人・保護者の願いや心配な点をもとに，個別の支援計画を立て，全員で行う余暇活動と仕事体験，発表会等を組み合わせた年間の活動内容の計画を立てた。

TUBASA さんは，みんなとボウリングやバスケットボールをすることを希望したので，毎年実施した。バスケットボールは，コーチを招いて指

導をしてもらった。マジック，魚釣り，カヌー，パン作り等は他の会員の希望によるもので，いずれも地域のボランティアに依頼し支援を受けた。活動には４人～８人程度の中・高・大学生が参加した。TUBASA さんは，他の会員と一緒にカフェでのコーヒードリップ・販売，図書館の書庫整理，博物館の学芸員体験等に参加した。全ての活動後に振り返りを行った。コミュニケーションや対人関係の構築が苦手な会員にとって，自己評価を言語化するとともに，他者からも評価を得てセルフモニタリングする力を身に付けることと，継続した振り返りの中で「次の時はどう取り組んだら良いか」を考える機会を増やし，自分自身で取組についてプランニングする力を高めるためである。最初の頃は，振り返りシートに何を書いて良いか分からず，戸惑っていたが，筆者が選択肢を出して感想を聞き，答えたことを書くように指示した。次第に時間はかかるものの，一人で考えて書くことができるようになった。図１にカフェ終了後の振り返りシートの一部を示した。図１から，自分の目標を最初に決め，終了後に４段階評価で自己評価して，良かった点や難しかった点，前回のカフェの時との比較を文で表わすことが少しできるようになったことが分かる。

また TUBASA さんは，自分から積極的に話しかけることはなかったものの，運動では意欲的にコーチに教えられた通りの声かけをしてボールを回したり，ボウリングで他の会員が良いスコアを出すと拍手をしたり，求められてハイタッチをしたりするようになった。魚釣りでは糸が絡んだり，針をうまくつけられなかったりした時に，自分からボランティアの方に声をかけて援助を求めるようになった。８月の「本人・保護者の体験発


平成２６年９月２８日　名前（

竹末市民センター　ミツバチカフェについて

（１）今日の自分の目標

最後までやり通す

（２）目標は、達成できましたか？

とてもできた（○）できた（　）少しできた（　）

あまりできなかった（　）

（３）ミツバチカフェに参加して、どう思いましたか？

①良かったこと

みんなと協力しておいしいコーヒーを出せたこと

②むずかしかったこと、うまくできなかったこと

いっぱいお客様がきたときにどうしていいかわからなかった

（２）熊西市民センターの時と比べて、できたことは、ありますか？

コーヒーをうまくいれたこと

図１　カフェ終了後の振り返りシート

表１　TUBASA さんが中学２年生の時のキャリアサポートクラブ年間活動内容

月日	内容	場所等
４月４日	**個人懇談，活動計画話し合い，カフェ練習**	コムシティ
５月 17 日	**A 市民センター祭りでカフェ出店**	A 市民センター
６月６日	**マジック講習，ボウリング**	コムシティ，ボウリング場
７月４日	**図書館バックヤード見学と体験**	八幡図書館
７月 24 日	アセスメント	コムシティ
８月２日	**就労に向けた親子学習会・講演会発表練習**	コムシティ
８月４日	**図書館ボランティア体験**	八幡図書館
８月 11 日	**本人・保護者の体験発表と講演会**	黒崎ひびしんホール
９月 19 日	**カヌー体験**	A 市民センター，田良原池
10 月４日	**B 市民センター祭りでカフェ出店**	B 市民センター
10 月 18 日	**魚釣り**	脇田海釣り桟橋
11 月８日	**「であい・ゆめ広場」でカフェ出店**	コムシティ
12 月６日	**バックヤード見学と学芸員体験**	いのちのたび博物館
12 月９日	個人懇談	コムシティ
１月 17 日	**パン講習**	コムシティ調理室
２月６日	**運動（バスケットとスナッグゴルフ）**	特別支援学校体育館
３月５日	**パフォーマンスレッスン，１年の振り返り**	コムシティ
	保護者総会	コムシティ

＊太字は，全員を対象に行った活動である。

表と講演会」に向けて，事前に自分ができる役割や発表内容について話し合い，TUBASAさんは，カフェでのコーヒードリップや販売について，写真をスクリーンに映して発表することとなった。事前に保護者を招いてミニ発表会を行って練習したので，当日は練習より緊張しないで発表することができた。また，高校生や大学生を中心に，椅子並べやチラシを持って会場案内する等の役割を分担し，TUBASAさんも声を出して案内や誘導をすることができた。

(3) 進路選択

3年生になり前述したWISC-Ⅳを実施した結果を受けて，第一筆者とTUBASAさん，保護者と進路に関する話し合いを行った。以前からいくつもの高等学校のオープンキャンパスに親子で参加し，TUBASAさんの希望や通いやすさ，比較的少人数で，特別支援教育に理解のある学校，高等学校卒業後の進路先の選択肢等を考慮して受験先を検討した。中学校の三者面談でも学校の理解を得て，志望校に中学で受けている配慮を伝えて受験し，合格した。

第一筆者の勧めで，保護者はTUBASAさんのプロフィールブックを作成し，入学前の3月末に高等学校に持参し，コース主任，養護教諭に配慮して欲しい点や具体的なエピソードを伝えた。生育暦・診断暦，現在の様子（情緒面，学習面，身体面），配慮をお願いすることの4項目をA4用紙2枚に記載し，WISCやDN-CASで明らかになった認知特性や苦手に対する具体的配慮事項（テスト用紙や問題用紙の拡大コピー，座席配置，具体的声かけ，身体的配慮等）も記載の上，口頭で伝えられた。

プロフィールブックの記載項目は，1.生育暦・診断暦で，氏名，保護者名，性別，性格，生年月日，血液型，連絡先，家族構成，かかりつけ医，発達や診断の記録（出生時，小・中学校時代の発達の様子や対応・配慮）であった。2.現在の様子(1) 情緒面・学習面（2）身体面であった。3.先生方にご相談お願いしたいこととして，具体的内容が9項目記載された。

4. 高校生の時期の取り組み経過

1）高校1年時の様子

TUBASAさんは，普通科の進学コースに在籍した。学級の人数は30名弱で生徒同士の仲も良く，公共交通機関を乗り継いでの通学にも慣れ，定期テストの結果も上位にあった。教師の声かけや配慮もなされ，初めて体験する学校行事でも心配なく過ごした。また，TUBASAさんの良さを生かし，大きな集団でも力を発揮できるようにするため，小学生から続けているピアノ演奏を活かし，全体の場でピアノ伴奏をする機会を定期的に設けてもらっていた。

2）学習の習得度と認知特性に関する実態整理と対応

1年次の終わりから成績が下がり始め，本人も学習の難しさを感じるようになった。成績を聞くとともに，最も成績の良くない教科の定期考査の問題や解答用紙を見せてもらった。プロフィールブックで細かい図や文字，行間が詰まっていると見づらいため，必要に応じてテストの問題用紙や解答用紙を拡大コピーしてもらえるよう頼んでいたが，全教科には伝わっていなかった。問題の文字が小さく，余白に計算している自分の書いた字を間違えて解答用紙に転記している場所があったり，時間が足りなかったのか手つかずの問題があったりして，理解できていないわけではないようであった。現在の学習の習得度を調べ，今後のTUBASAさんの取り組みや必要な支援を明らかにするためK-ABC Ⅱを実施した。検査時の様子から，視覚情報に基づいて課題解決をする問題については，かなり努力をしても困難であることが明らかであった。数的推論や計算といった視覚情報を必要とする課題においては，K-ABC Ⅱのように，問題が見やすく整理され，時間の余裕があり，思考過程を書き出すスペースが十分あれば，正解に到達しやすいことも明らかになった。検査実施時のように，細かくTUBASAさんの様子を観察しないと，TUBASAさんの困難性は分かりづらく，本人も他の生徒との見え方の違いや自分の持つ困難性を自覚はしていないことが明らかになった。

今後の学校生活，進学，就職等を考えていく上で，TUBASAさんの持つ「分かりにくい障害」について，本人・保護者が再度自覚し，関わる人に理解を求めることが望まれた。第一筆者は第二筆者に相談し，合理的配慮を得られやすくするために，社会人になるまでの間で，何らかの障害者手帳の取得について主治医と相談して可能性を探ることをTUBASAさんと保護者に勧めた。手帳取得により支援の対象者と認められることになり，就職や職場配置で効果があるかもしれないと考えたからである。

学校に対して望む具体的な支援，TUBASAさんが取り組むべき内容，およびキャリアサポートクラブで行った支援は以下の通りであった。学校に望む支援の第一は，TUBASAさんが見やすい

フォントやサイズの文字，行間・字間・量で教材や課題の提示をしてもらうことである。数学の試験で，TUBASA さんが計算している文字の大きさが本人の最も見やすい文字の大きさではないかと思われた。それに比すると，問題用紙の文字は小さすぎて，TUBASA さんは苦労して見ていることが推察された。中学校の時に配慮してもらっていた試験問題やノートを高等学校の先生に見せて伝え，「このような支援をしてもらっていた。同様の支援をして欲しい」と伝え，全教科の先生に見え方の特性を理解してもらうように依頼し，実現すれば大学でも同様の支援が求めやすい，と考えた。学校に望む支援の第二は，新しい場面では力を発揮するのに時間がかかるため，最初に説明や他の生徒がする様子を見せ，イメージを持てるような配慮をしてもらうことであった。その上で，TUBASA さんが自覚して取り組むべきことは，自分の特性を理解し，自分から積極的に先生に困り感を伝え相談し，情報を得るようにしていくことであった。そのために，高校の中で話せる先生，聞いてくださる先生が誰か，分かりやいよう配慮してもらうことが望まれた。

キャリアサポートクラブで必要な支援は，色々な仕事体験やボランティア活動等を通し，難しい体験，うまくいった体験を積み重ね，社会で生かすことのできる力を身につけていくことであった。

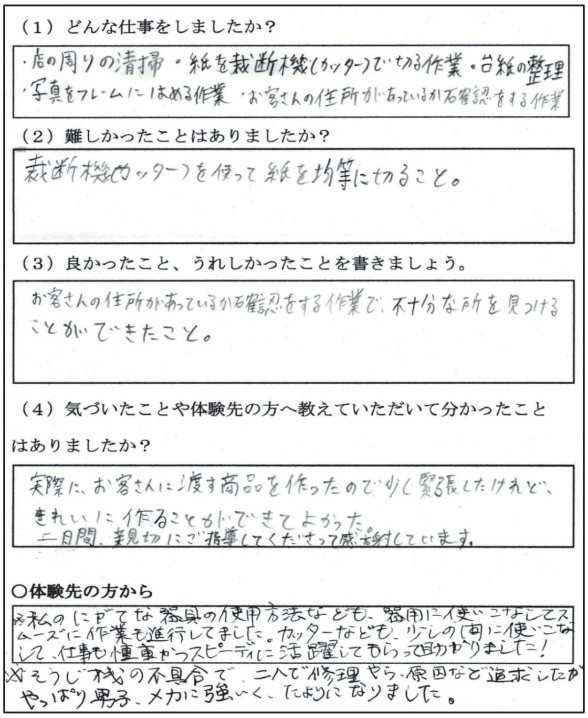
保護者が高等学校の教員に懇談の機会を設定してもらい，検査結果と対応についての文書，中学校の頃のノートや試験問題等をもとに話し合った。その結果，関わる先生に視機能に関する課題を再認識してもらい，B4 の問題用紙を A3 に拡大してもらうことになった。さらに TUBASA さんの表情を見て声かけをして，本人からの訴えや話しかけがしやすいよう，配慮してくださるようになった。自分の希望する進路も明確になり，オープンキャンパスを繰り返し，志望校も明確になった。大学受験に向けた面接や学習計画書作成，小論文対策等について，学校は TUBASA さんに合わせて細かく指導をしてくださった。練習ではうまくできても，校長室での模擬面接ではうまくいかず悔しい思いをしていると，担任の先生が表情を見て，声をかけて気持ちを前向きにしてもらったと TUBASA さんから報告があった。学校での様子を家族に伝えながら振り返りをして，自分の苦手なことも含めて，受験に向けて取り組むことができた。

3）キャリアサポートクラブでの取り組み

TUBASA さんは，高等学校 3 年間，月 1 回程度の活動に参加し，調理，仕事体験，運動（バスケット，ボウリング，ゴルフ等）等に取り組んだ。TUBASA さんが高校生の間に行った仕事体験先は，公共施設 3 ヶ所（博物館，図書館，埋蔵文化財センター），企業 5 ヶ所（精肉店，自動車工場，電力会社，整骨院，写真館）であった。希望を聞き，地域の公共施設や企業と交渉して半日程度の仕事を依頼し，了解を得た施設や企業であった。6 人の仲間と一緒に行った。

これまで単独で仕事体験に行ったことはなかったが，TUBASA さんは，少人数の中では報告ができるようになっており，「一人で地域社会の方と接し，自分の力を試してみることが望ましい時期である。仕事内容として事務系と身体を動かす仕事の両方があり，少人数の職場での仕事体験が適切である」とクラブのスタッフ間で話し合い，2 年生の終わりに TUBASA さんと保護者に提案した。高等学校から近く通勤も一人でできて，写真を撮ってもらったこともある写真館で 2 日間の仕事体験を実施した。

写真館での仕事体験振り返りシートの一部を図 2 に示した。仕事内容，難しかった点，良かった点，気づいたこと，教えていただいて分かったことの 4 点について，TUBASA さんが自分で考え，丁寧に表記し体験先の方へのお礼も記していた。


（1）どんな仕事をしましたか？

・店の周りの清掃・紙を裁断機（カッター）で切る作業・台紙の整理
・写真をフレームにはめる作業・お客さんの住所があっているか確認をする作業

（2）難しかったことはありましたか？

裁断機（カッター）を使って紙を均等に切ること。

（3）良かったこと、うれしかったことを書きましょう。

お客さんの住所があっているか確認をする作業で、不十分な所を見つけることができたこと。

（4）気づいたことや体験先の方へ教えていただいて分かったことはありましたか？

実際に、お客さんに渡す商品を作ったので少し緊張したけれど、きれいに作ることができてよかった。
二日間、親切にご指導してくださって感謝しています。

○体験先の方から

※私のにがてな器具の使用方法なども、器用に使いこなしてスムーズに作業も進行してました。カッターなども、少しの間に使いこなして、仕事も慎重かつスピーディに活躍してもらって助かりました！
※そうじ機の不具合で、二人で修理やら、原因など追求したかやっぱり男子、メカに強いく、たよりになりました。

図 2　写真館での仕事体験振り返りシート

担当者の方は，TUBASAさんの良い点を見つけ，認めてくださった。

仕事体験の依頼時に簡単な履歴書を持参して体験の了解を得て，1週間前にTUBASAさん，保護者と第一筆者で訪問して代表者に会った。特性や視力について伝えるとともに，出勤時の入口，退勤時の出口，服装，仕事の開始時刻と終了予定時刻，振り返りシートを書く時間と提出先等，TUBASAさん，保護者とともに確認した。これにより，両者ともに安心した様子であった。それまでの仕事体験では保護者が送迎することもあったが，今回は自分一人で行って帰り，終わったら報告の連絡をするよう約束した。途中，スタッフが訪問して仕事中の様子を写真に撮り，様子を聞いた。写真館では様々な仕事内容を準備してくださり，ゴミの収集，店の周りやベランダの清掃，高圧洗浄機を使った土間磨き，花の水やり，お客様台帳の照合，裁断機を使った紙の裁断，台紙の整理，お客様に渡す写真をフレームに入れる作業等，多くの体験をすることができた。図2の記述にあるように，TUBASAさんは従業員の方からの世間話にも応答でき，あいさつ，報告等も予想以上にできた。写真館の方は，掃除がきれいにできたこと，写真カッターや台紙の扱いが慎重で丁寧に作業できたこと，器具の使用方法を短い間に理解して慎重かつスピーディーにできたことを認めて，本人に伝えてくださったため，初めての一人での仕事体験についてTUBASAさんの満足度は高かった。

この仕事体験後に第一筆者と保護者と一緒に振り返りをした際に，TUBASAさんから，「初日は緊張したけれど二日目から大丈夫になった。」「色々なところを掃除することで，私たちの身の回りをきれいにしてくださる人の大変さを実感することができた」，「お客様の住所と台帳の確認をする時に定規を使って目がそれないよう工夫することで，事務的なことも自分にはできると思った」と今後のポイントになる3つの発言があった。仕事体験をすることで，①最初に自分のことをある程度知っておいてもらえば，くり返しの中で緊張が和らぎ，力を発揮できること，②色々な仕事があり仕事をする方々のおかげで社会が回っていることを実感できたこと，③事務系の仕事も工夫すればできると思ったことである。

仕事体験以外にゴルフレッスン，ボウリング，卓球等のスポーツを毎年複数回行い，ラーメン作り，巻き寿司作り等の調理，カフェでのコーヒードリップ販売も行った。毎回，活動後に他の会員と一緒に振り返りの機会を持つようにした。これらの積み重ねにより，感想をまとめて書いたり言ったりすることがスムーズになり，時間を要さなくなってきた。他の会員の様子もよく見ていて，「Aさんは，前より○○が上手になった」等自発的に言うようになった。

4）進路選択

様々な体験活動を通して，博物館・歴史・埋蔵文化財等への興味が高くなり，将来の進路希望が明確になった。TUBASAさんの希望は，興味のある学問が学べ，少人数でアットホームな雰囲気の大学だった。県内外の多くの大学のオープンキャンパスに参加し，施設見学とともに模擬講義や先輩の話を聞き，実際に自分に合う大学を選んだ。TUBASAさんは，受験前にシラバスを調べた上で志望動機や修学計画書を作成したことにより，現在在籍している大学のコースに自分の学びたいことがあると確信したと話してくれた。加えて，TUBASAさんが幼い頃から続けているピアノを活かして，オルガニストの教官から本格的なパイプオルガンの演奏を学べることも大きな魅力であった。

受験に向けての相談を第一筆者とTUBASAさん，保護者と行った。これまで高校生の間に取り組んできたことを振り返り，文章化して志望動機を明確にしたり，面接練習の様子をビデオに撮って，TUBASAさんと保護者でチェックして次に生かすことを提案したり，高等学校での合理的配慮を伝えて，受験時や合格後の大学生活でも配慮を要請すること等を話し合ったりした。保護者は，オープンキャンパス等で大学教官と話し，学生相談室の存在や，合格後の関係者会議等について情報を得た。TUBASAさんは，大学に関する情報を集め，自分に最も合った受験の方法（小論文と調査書が良いか，教科の試験を受けた方が良いか等）を考え，「合格したら海外留学してみたい。色々な遺跡なども見てみたい。語学も勉強したい。」等，夢を持って受験勉強に取り組んだ。結果，県内の大学の少人数で構成される文系学部に進学し，交通機関を乗り継いで，通学することになった。

5. 大学生の時期の取り組みと就職活動

1）合理的配慮の申請と決定

合格決定後，TUBASAさん，保護者と第一筆者で懇談を行い，大学生活を想定して必要な支援や配慮を検討した。この内容を含めて保護者がプロフィールブックを作成し，TUBASAさんと保護者で大学への配慮申請を行った。入学後まもな

く，所属学部教員，学生相談室カウンセラー，学生課，教務課等が参加し，支援会議が開かれた。高等学校卒業前に精神保健福祉手帳２級の交付を受け，高等学校においても配慮を得ていたことから，TUBASA さんの配慮申請はほぼ認められ，申請内容ごとに，TUBASA さん本人の取り組み，学生相談室の取り組み，関係部署の取り組みが明示された。大学生になり，保護者に頼らず困ったことはその都度自分で相談できるよう，学生相談室のカウンセラーに，学生課，教務課，就職課等，相談先のキーパーソンを教えてもらったことを，TUBASA さんはとても心強く感じたと言っていた。これまでの保護者を介しての支援要請が TUBASA さん本人からの申し出や自己申告，必要に応じ自分から担当者に相談に行くスタイルに移行した。大学において教官や学生課等とのやりとりは，メールや Moodle を使うことが主であり，このことが TUBASA さんには適していた。前もって準備して尋ねたり依頼したりできるため，直接口頭で申し出るより精神的な負担が少なく，確実性が高かった。

2）大学１・２年時の大学生活

コロナ禍のため１年次は休校後，ほとんどの授業がオンラインになった。TUBASA さんは，当初，オンライン授業に不安を感じていたが，これまでのアセスメントをもとに，視覚認知はやや弱く時間がかかるが，言語理解やワーキングメモリー，聴覚情報活用が強みであることを理解していたので，Moodle に上がってきた講義を何度も聞き直したり，レポート提出時には，Word の音声読み上げ機能を利用して文章推敲をしたりするようになった。通学の時間がなく，大学の授業スタイルに慣れる上では，TUBASA さんにとって良い点が多かった。

TUBASA さんは，授業に必ず出席し，規則正しい生活を心がけていた。配慮申請に対して示された「本人の取り組み」に明示された通り，大学での情報を見逃さないよう，学内 Web 掲示板を毎日数回確認する習慣が身についた。画面越しで他の学生の顔と名前を確認し，グループでの討議をすることにも少しずつ慣れ，１年次に自分からクラスメイトに「自分は緊張してしゃべるのが苦手ですが，話しかけてくれると嬉しいです。」と伝えたそうである。次第に友だちや先輩とのLINE グループを作るようになり，相談や情報交換をするようになった。

家にこもる時間が多かったので，キャリアサポートクラブでは，屋外スポーツの機会を作り，心身のリフレッシュと運動不足の解消を図りつつ，オンラインでの大学生活の様子を聞くようにして関わった。

２年次から本格的に大学への通学や対面での講義，サークル活動等が始まった。これに先駆け，１年次の３月末に TUBASA さんと保護者と第一筆者で懇談を行った。２年次前期の時間割の予定を確認し，１週間の毎日のタイムスケジュールを図式化した。TUBASA さんは，グループワークでの演習で記録係の役割をした時，聞いたことを書き取るのに時間がかかり，その間に次の発言を聞き漏らすことが心配であると相談した。そこで，会話の音声を文字化するアプリを紹介し，それを使うことの了解を担当教官に申し出るように勧めた。１年次に文書で配慮申請をしており，対面の授業でも可能な限り自分から配慮を申し出た方が良いのではないかと勧めると，TUBASA さんは早速担当教官に連絡を取って，状況を伝えることにした。また，メールを使って自分から教官や学生相談室のカウンセラーに連絡を取り，必要な依頼をすることができるようになっていた。その後も，分からないことはその都度，積極的に学部，学年主任や教官，友人に相談したり聞いたりした。

学生相談室には，長期休暇を除いて２週間に１回の頻度で行き，特に困りごとが無い時も面接を重ねることによって，TUBASA さんはお互いがわかり合い信頼関係を築くことができたと感じていた。後に就職活動を行うようになり，困った時など迅速かつ的確に学内の他部署や企業などと連携をとり対応してもらうことができ，本人の安心感に繋がった。

特技のピアノを活かし，パイプオルガンの演奏にチャレンジして練習を重ね，学内のチャペルで演奏するようになった。また，趣味の鉄道研究部に入り，大学祭や他大学との合同イベントにも参加するようになった。

3）就職活動に向けて

２年次後半からの TUBASA さんの就職に向けた取り組みを表２に示した。２年次後半からの大学内の取り組み，インターンシップ，TUBASA さんが行った就職活動，対応したキャリアサポートクラブの取り組みを表した。３年次が充実していたことがわかる。

TUBASA さんは，学芸員の資格を取って仕事をする夢を持っていたが，歴史，考古学の授業や学外実習等を経験する中で，自分が想像した以上に大変で，雇用の少なさや待遇，雑務の多さ等を

知り職業選択から外し，趣味として続けたいと思うようになった。これまでの学校生活を通して，TUBASAさんは，自分の特性を理解してもらい，合理的配慮を要請することで，自分の能力が発揮できることを感じてきたため，保護者と相談して，特性理解や合理的配慮が受けやすい障害者雇用枠での就職活動を希望するようになった。そこで，2年次の終わりに保護者がTUBASAさんと一緒に，学生相談室や就職課に就職活動支援の依頼に出向くとともに，居住する市の障害者就業・生活支援センターで障害者雇用制度について教えてもらい，障害者雇用の就職エージェントへの登録も行った。

4）3年次の就職に向けた取り組み

色々な企業の企業説明会に参加するとともに，学生相談室や就職課に相談し，障害のある学生のためのインターンシップを行う企業Aの紹介を受け，夏に5日間のインターンシップに参加した。履歴書・自己紹介書に記載する内容について，大学に相談して支援を受け，自己PRとして「自分の考えを表現することが苦手だが，努力と時間を使うことで補うよう心がけ，目標に向かって頑張り成果を上げることができる」ことをあげた。大手企業の総務や営業職等の社員さんと関わりながら，緊張はするものの以前に比べるとスムーズに話すことができたと感じたそうである。振り返りの感想を書く際等に時間がかかることがあったが，提出した文書を見て，「こんなに丁寧に考えて書いてくるのだ」と驚かれたこともあったそうである。色々な仕事を体験させてもらい，社員の方の働く姿を間近で見たことで，TUBASAさんは，実際に働くイメージを深めることができ，自分自身が働くことに手応えも感じられた。

TUBASAさんは，保護者と相談して，次年度の就職活動の準備として地方公務員の障害者枠の採用試験を受けてみることにした。この時に初めて，障害者手帳の内容等，仕事をする上で必要な配慮・支援および配慮等が必要な理由を面接票に記載することになった。第一筆者とTUBASAさん，保護者で何度か話し合い，配慮・支援，その理由を検討し，この面接票を大学の学生相談室でも確認してもらった。二次試験に進み，筆記試験や適性検査，個別面接を受けた。二次面接の想定

表2　大学2年次からのTUBASAさんの就職に向けた取り組み

時期		大学内での取り組み	インターンシップ	就職活動	キャリアサポートクラブの関わり
2年次	11月～	就職課に相談 障害者雇用を検討			
	2～3月	保護者が出向き，就職活動支援の依頼			1年の振り返りと次年度に向け本人・保護者と懇談
3年次	4月～	インターンシップ先の相談・紹介			
	8月		大手企業Aにて5日間	企業説明会に参加	インターンシップ後の振り返り
	10月	履歴書・自己紹介書の記載内容検討，支援		公務員試験一次受験	＊面接票に記載する配慮事項の検討
	12月	面接練習		公務員試験二次受験	＊二次面接練習
	2月	関係大学インクルージョン支援室のセミナー参加（障害者雇用の説明，企業紹介等）		多くの企業説明会に参加	＊公務員試験結果の振り返りと今後に活かす点や希望企業の検討
	3月	学生相談室，就職課等でエントリーシートに記載する内容や配慮事項への助言	企業Aの植樹祭に参加	障害者向け就活サイトから数十社に登録，エントリーシート提出	＊エントリーシートに記載する配慮事項の検討
4年次	4～6月	障害者のための合同企業説明会の紹介		企業数社の適性検査，第一次審査，面接	＊企業Bの情報収集，想定質問及び自己PRの内容検討，オンライン面接練習，対面面接練習
			企業Bの希望部署にて5日間	最終面接	
	9月～			内定予定	2回目の博物館学芸員資格実習

質問を第一筆者が準備し，練習を重ねた。不合格であったが，面接内容と TUBASA さんの回答内容等を全て聞き書き出して，振り返りを行った。TUBASA さんは，当初はショックを受けたが，自身の準備不足や本当に公務員になりたかったのか等，自分を見つめ直すことができたと言っていた。選考の雰囲気を知ることができたこと，客観的に自分の長所や短所を知ることができたこと等，自己分析が進み，気持ちを切り替えて，3年次末からの本格的な就職活動に備えることができた。

学生相談室のカウンセラーから関係する大学のインクルージョン支援室のセミナーがあることを紹介してもらい，2月に参加した。TUBASA さんは，他大学の学生に混じって，障害者雇用についての説明を聞き，企業ブースのうちA社，B社ともう1社を選んで回った。障害者雇用に関する説明の中で，エリア職があることや，1年契約で働き5年継続すると期限無し契約になる企業があること，発達障害があって雇用された方の実際の仕事内容等を知ることができた。

就職課に来る求人は限られていたので，TUBASA さんは3月頃から障害者向け就職サイトから情報を得るようになった。保護者と相談しながら受けてみたい企業を選んで10数社の登録をしていた。登録したらエントリーシートを書き，成績登録，ネットでの適性検査，一次審査と進んでいくため，TUBASA さんは，エントリーシートに記載する内容や配慮事項を第一筆者と検討し大学に助言を得る流れで進めた。

3年次末の春休みに TUBASA さん，保護者，第一筆者でこれまでの振り返りと現状の整理，これからの方針の確認を行った。情報を整理し，本人の特性や希望に合う就職先の方向性を選定することで，不安や迷いを少なくして，本人の長所である「努力と時間を使い，目標に向かって頑張り，成果を上げることができる」と考えたためである。懇談の間にファイルで情報共有して状況報告や確認を行い，以下の5点を確認した。

第一は，TUBASA さんの願いである「自分の長所とともに，うまくできない点も隠さず伝えて配慮を受けながら，努力して時間をかけて成果を出して，働き続けたい」ということである。そのために必要なことは，TUBASA さんの長所と短所，思いを履歴書に明確に書き，端的で分かりやすい配慮事項の記載を工夫することである。

第二は，就職先希望についてである。大学選択の時と同様に，多くの企業の説明会に参加したり，ネットでの情報収集をしたりして，TUBASA さんは各企業の社風や実際に雇用されている障害者の職種もある程度把握していた。TUBASA さんは，障害者雇用に積極的で雇用歴があり，県内に勤務先があり，転勤がない企業を希望先の優先条件として上げた。ホームページに記載されている社長の言葉に感銘し，品質第一主義の社風や地域貢献，ダイバーシティグループ企業であるB社を第一希望とすることにした。公務員試験は募集開始が遅いので，まず民間企業への就職活動を行い，内定を目指すこととした。

第三は，早めの準備と対応をすることである。TUBASA さんは，初めてのことには緊張して実力を発揮できないことがあるが，準備と対応を自分が納得するまでできれば，比較的スムーズに行えることが，本人，保護者，支援者ともに分かっていた。そこで適性検査と面接は何度も練習して慣れることが必要と感じ，準備ができ次第，練習を始めることにした。

第四は，第一希望のB社についてホームページに記載されていることを熟読し，関連する新聞記事を集め，関連施設や工場を見学する等，B社について調べ体感することであった。

第五は，実際に就職活動が進み，疑問に思ったり不安を感じたりしたら，こまめに学生相談室や就職課，第一筆者に相談し，情報共有をして進めていくことであった。

5）大学4年次の就職に向けた取り組み

TUBASA さんは，B社の選考ステップや受け取ったメールを第一筆者に伝え，タイムスケジュールを一緒に検討した。3月の話し合い後に，自分で適性検査について画面表示を工夫したり，自宅だけでなくテストセンターで受けたりして，練習を重ねた。面接は，第一次，第二次，最終面接と3回あったので，第一次面接練習をオンラインで3回，第二次面接練習をオンラインで1回，対面で2回行った。いずれも，第一筆者が想定質問を考えてオンラインで実施した後，TUBASA さんと保護者と一緒にオンラインで振り返り，良かった点と改善すべき点を協議した。想定質問は面接後にメールで TUBASA さんに送り，スムーズに答えられるよう自宅で保護者に見てもらいながら練習を重ねた。二次面接の質問の中では，B社について TUBASA さんが調べて感じたことや企業理念の中で賛同した点，B社の中で取り組んでみたい仕事のイメージを自分の言葉で面接官の方に伝えられるように，取り組んだ。

一次面接を通過し，適性検査と二次面接が行わ

れた。二次面接は対面で行われるため，練習を始める前にTUBASAさんと筆者で目標を確認した。第一は，大き目の声となるべく目線を合わせることを意識すること，第二は，原稿と違っても良いので自分の言葉で，自分にしかない魅力をPRすること，第三は，返答に困ったら「少し待ってください」等，何か反応するようにすることであった。少しずつ質問内容を変えて練習を重ねる中で，TUBASAさん自身が自分の足りないところや苦手なところが分かり，落ち着いて自分の言葉で伝えることができるようになった。特に，希望する部門部署，仕事内容について，自分自身で調べたことを基に，理由と自分の特性に合っている点，その上で採用後に配慮して欲しい事項を含め，自分の言葉で話せるようになった。

大学から障害者のための合同企業説明会の紹介があり，対面での説明会にTUBASAさんも参加した。そこには，B社も参加していた。TUBASAさんは，希望する配属先で5日間のインターンシップを行い，最終面接に進むことになった。この間もいくつかの企業の面接等，就職活動は並行して行っており，TUBASAさんは，スケジュール管理や緊張状態が続くこと等，大変なことも多かったが，その中で学ぶことも多かった。

B社でのインターンシップは，TUBASAさんの希望する部署で事務系の仕事であった。これまでのセミナーや合同説明会で会ったB社の担当者の方が，TUBASAさんの熱心な様子を覚えていて初日に来てくださった。TUBASAさんは，初日の説明資料をパワーポイントの4分割でもらった時に，文字が小さく書き込みもしづらいと感じ，自分から2分割でもらえないか依頼し，すぐに変更してもらった。2日目からデスクとノートパソコンをもらい文書作成が始まったが，色々なデータを開きつつ文書作成をするので画面が小さいと感じたTUBASAさんは，周囲の方を観察し，デスクトップパソコンのモニターとノートパソコンを連動して使っている社員の方がいて，TUBASAさんの机上にもパソコンモニターがあったことから，担当者の方に「2つを連動させて使わせてください」と頼んだところ，すぐに使い方を教えてもらったそうである。その後も，資料活用や文書作成で困ったことがあると，報告して教えてもらい，文書を提出して修正や足りない点を補ってもらうことで，完成することができた。最終面接は四対一面接だったが，TUBASAは落ち着いて臨むことができた。

また，振り返り日誌を毎日，勤務終了前の10分間でまとめて担当者に送ることになっていたが，TUBASAさんは30分以上かかったことから，2日目は1時間とってもらったそうである。日誌は，仕事内容，気づきや感想，連絡事項を記載するシンプルなものであるが，TUBASAさんは日頃からメモをとる量が膨大で，その中から抜き取ったり整理したりして書くため時間がかかるが，配慮事項に上げていたため，担当者が実際の様子を見て理解して下さった。

B社の内定を得ることができ，その他に進行していた就職活動は終了となった。C社の採用担当者から，発達障害の方を雇用したい希望はあるが，雇用後の職場の理解や合理的配慮ついてまだ十分できていない現状であることを教えてもらったり，D社の採用担当者からは，面接時のフィードバックをしてもらったりと，親身に対応して下さる企業があり，TUBASAさんが「社会で働く」ことを学ぶ上で，とても貴重な体験になったと感じたと言っていた。

Ⅳ　インタビュー結果

1. 幼児期から現在までの変容

1）本人が感じる変容

大学生になってから，分からないことは自分で窓口に行ったり，メールをしたりして尋ねるようになった。聴覚優位と教えてもらって，大学での講義を録音して聞き返したり，作成文書を読み上げ機能を使って確認したりすることで，作成するレポートが充実して良かった。成績も上がり，自分は時間がかかっても，何回も繰り返しやればうまくいくと自信がついた。打たれ強くなった。コミュニケーション力，交渉力が身についたと思う。コミュニケーションで困ることはあまりなくなった。就職活動を始めた頃は不採用の断りメールが続き不安だったが，学生相談室，就職課，教官，友人，第一筆者，関わって下さった企業の方々，家族に支えてもらったおかげで，成長することができたと感じている。

2）保護者が感じる変容

コミュニケーションが苦手で新しい環境に慣れるか，小さい頃から不安だった。小学校の就学相談で第一筆者と出会い助言を得て，小学校入学時から中学・高校・大学とずっと学校に出向いて，担任やキーパーソンになる方と直接会って，プロフィールブックを渡して，子どもの実情を説明し理解を求めてきた。キャリアサポートクラブでの余暇や仕事体験やスポーツ教室参加等，学校以外

でも色々な体験を積むことで少しずつコミュニケーションの苦手さが緩和されたと思う。早期から色々な仕事を体験したことで，就職活動のインターンシップにもスムーズに参加することができた。振り返りの習慣をつけてもらったため，就職活動でも自ら振り返りをすることができるようになった。保育所の頃から継続した関わりがあり，特性に合わせ，数年後の将来を見据えた支援があり，保護者同士のつながりもできたため，保護者もイメージが持ちやすかった。大学選択，就職選択時に色々なところを実際に見て，自分で進路を選択・決定することができるようになった。

2. 学校や企業，社会に求めること

就職に際し，一般採用，障害者採用，特例子会社での採用，就労支援の利用等があり，その制度や形態，メリット・デメリット等が分かりづらかったので，早い段階から分かるような支援があると良いと思う。官公庁については，障害のある学生対象のインターンシップがあればと思う。企業については，双方のジョブマッチングが重要だと考えるため，多くの企業で障害のある学生を対象とした1週間程度のインターンシップが重要だと思う。官公庁や企業においては，多様性のある社会に対応したダイバーシティ推進をお願いできればと思う。

発達障害のある人の凸凹の凹の部分への配慮があれば就労や社会参加が可能であることについて，社会全体の理解が進めばよいと思う。

V　考察

16年間にわたるTSUBASAさんへのキャリア支援について効果的であった点について考察を加える。

1. 義務教育終了後も継続した支援ができた

TUBASAさんの卒業後を見通した支援方針，支援計画に基づき，義務教育終了後も継続して関わることで，TUBASAさんや保護者が主体的に学校や企業等と情報を共有して，必要な支援や配慮を得ることができた。義務教育終了後も，必要なコミュニケーションや集団活動の課題に対する支援や社会体験，仕事体験を計画的，継続的に行ったことで，自信と見通しを持てるようになり，キャリア形成が進んだ。

2. アセスメントに基づき自己理解が進んだ

前川（2013）は，発達に障害のある人のアセスメントにおいて重要なことは，発達的な症状の経験的な記述ではなく，実践的な処方のための説明と予測，そして科学的基礎を提供するものでなければならない，と述べている。子どもの困難のメカニズムについて様々な情報を基に仮説を立て，仮説を基に子どもの困難を支える外的支えを作り，大人と子どもが共に取り組むことが教育・指導として行われ，課題の達成により仮説を確認する，ということを循環するように繰り返す作業が全体としてのアセスメントと示している。

中学生の頃からTUBASAさんのアセスメントの結果をもとに，第一筆者と第二筆者で仮説を立て，インフォーマルなアセスメントで裏付けし，TUBASAさんや保護者，学校関係者に特性を伝え，本人の困難を支える外的支えを合理的配慮として要請した。TUBASAさん自身が自分の得意・不得意を理解した上で，力を発揮しやすい方法を見つけ出し，根気強く取り組んできた。これらを定期的な懇談で確認したり修正したりしながら繰り返したことで，TUBASAさん自身の成長や変容を把握する具体的なアセスメントができ，特性理解が進んだと考えられる。その結果，TUBASAさんは自分に必要な支援や配慮を求め，学習や仕事の成果を上げることができた。

特別支援教育は，障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち，幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し，その持てる力を高め，生活や学習上の困難を改善又は克服するため，適切な指導及び必要な支援を行うものである。アセスメントに基づく教育的ニーズの把握やそれに対する指導や支援の結果，TUBASAさんは自己理解が進み，自立や社会参加に向け困難点に対処する主体的な取り組みができるようになったと言える。

3. 移行期の情報共有が活きた

TUBASAさんのポートフォリオとともに，保育所から小学校，中学校，高等学校，大学と個別の指導計画，受けていた配慮事項の記録などが引き継がれたことが，次のステージでの配慮を受けることに繋がったと考えられる。支援開始時は合理的配慮の義務化前だったが，TUBASAさんと保護者の努力により，周囲の方が特性理解と必要な配慮をしてくださった。このことにより，TUBASAさんは努力の仕方が分かって，自分ができることをまじめにコツコツ続けることで，大抵のことができると実感し，成長したと言える。

4. キャリア形成ができた

梅永（2011）は，発達障害者は定型発達者に比較して，「ごく限られた職種しか知らない」，職種の選定の際，「職種（の理解）がおぼろげで抽象的である」，就労までの過程で「自分の就きたい

職種があいまいであるため，何をすればいいか分からず，具体的な職種を決めていても，そのために何をすればいいのか分からない」と示している。

TUBASAさんの場合，中学校・高等学校在学中の6年間に，キャリアサポートクラブの活動を通して公共施設3ヶ所（博物館2回，図書館2回，埋蔵文化財センター），企業5ヶ所（精肉店，自動車工場，電力会社，整骨院，写真館）と様々な職種で10回の仕事体験を行った。また，色々な年代，職種の方と交流し教わる社会体験も行った。加えて，年間2，3回，市民センター祭り等でカフェ体験を継続して行ったことで，手際よく時間内に美味しく提供することの大切さ，チームワークの必要性，お客様に喜んでもらう嬉しさ等を実感することができた。それらの過程で，振り返りシートを使って，気づいたことや今後に向けた課題を考え，書面にまとめることを繰り返してきた。その上で，他の参加者や支援者，職場の方の意見を聞くことにより，自分自身の振り返りをさらに深めることができた。自ら振り返りをする習慣は，就職活動においても企業でのインターンシップにおいて役立てられた。これらを通して，TUBASAさんは，梅永（2011）が定型発達者の就労意識として示している「多くの職種を知っている」，「職種の選定に際し，年齢とともに抽象的な職種から具体的な職種へ絞り込む」，「自分の就きたい職種に対して情報を集め，必要に応じ，研修やトレーニングを受けあるいは自分で学習する」を身につけたと言える。

国立政策研究所（2023）では，児童生徒が様々な役割の関係や価値を自ら判断し，取捨選択や創造を重ねることができるためには，組織的・体系的な働きかけと，そのキャリア教育の記録のキャリアパスポートが必要であると示し，振り返りから自己理解につなぐ活用が紹介されている。キャリア教育の目標は，児童生徒が学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら，社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身につけていくこととされている。TUBASAさんは，多様な仕事体験や社会体験と振り返りにより，他者や社会との関わりの中で様々な役割や価値に気づき，最適の関わり方や方法を自分で取捨選択したり，工夫したりする中で，キャリア形成と自己実現が育まれた。振り返りシートに書いて残すことが，キャリアパスポートと同様の働きをしていたと考えられる。

5. 自己実現を育むことができた

TUBASAさんは，幼児期に広汎性発達障害の診断を受け，社会的関係の形成の困難さ，言葉の発達の遅れの特徴があったが，通常の学級で学び通級による指導も受けていなかった。第一筆者は，「障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識，技能，態度，習慣を養い，もって心身の調和的発達の基盤を培う」自立活動の指導が必要であると感じていた。そのため，Ⅲ 1. 卒業後を見通した支援方針の③で示した「特性に応じたコミュニケーションや集団参加の課題について，自立活動のエッセンスを取り入れた活動内容や支援方法で取り組む」ことを上げ，キャリアサポートクラブの活動において，自立活動の中の「人間関係の形成」，「コミュニケーション」を特に意識した取り組みや手立てを取り入れた。自発的な関わりやコミュニケーションが苦手であったため，高校生や大学生のやりとりや支援者のモデルを見たりして練習し，繰り返し段階的に集団活動を経験した上で，様々な体験や出会いを通して，色々な年代の色々な職種の方との社会的な関係を持てるようにした。体験発表や仕事体験の振り返りをしたり，学校で大勢の前で演奏する機会を定期的に持ち，学習の成果を発表し教師や学生から認められる経験を重ねたりしたことで，TUBASAさん自身がインタビューで語っているように「繰り返しやればうまくいく」と自信がつき，自発的な関係作りができるようになったと考えられる。また，インターンシップの際に，業務上必要な配慮を自ら相談し交渉して，業務遂行に活かすことができたことから，キャリア教育の目標である「社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身につける」ことができたと言える。すなわち「自己実現」につながったと考えられる。

6. 障害者手帳の取得と得られた利点

TUBASAさんの持つ「分かりにくい障害」について，本人・保護者が自覚し，関わる人に理解を求めることは将来的にも望まれると考え，障害者手帳の取得の可能性について主治医と相談することを本人と保護者に勧めた。TUBASAさんと保護者は，これまで本人の特性を説明し，必要な配慮を学校に要請して得ることができていたため，大学や就職においても障害者手帳を取得しておくことは，合理的配慮を申請する時の根拠になると理解した。また必要な時に様々な福祉制度を利用することができ，手帳を取得することのデメリットは，感じていなかった。結果，高等学校卒

業前に精神保健福祉手帳を取得したことで，大学入試での配慮や，入学後すぐに学生相談室を中心に学部の教官等と相談する機会を得て，コロナ禍にあってもスムーズに大学生活に入ることができた。また，TUBASA さんが障害者雇用を希望し，積極的に障害者雇用をする企業の情報収集とアプローチを行ったため，企業側にとって，①障害者手帳を持っていること，②自分の特性を理解して，必要な合理的配慮を自ら求めることができること，の 2 点において採用の評価が高かったと思われる。

Ⅵ　謝辞

これまでの実践を論文として執筆することを快く承諾して下さった上に，16 年間の取り組みを一緒に振り返って，事実の確認やその時の思い等を伝えてくださった TUBASA さんとご両親に，心から感謝を申し上げます。

Ⅶ　文献

1）中央教育審議会（1999）初等中等教育と高等教育の接続について.
2）中央教育審議会（2011）今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について.
3）樋口陽子・納富恵子（2010）知的障害特別支援学校における自閉症生徒の就労支援の取り組み．特殊教育学研究，第 48 巻，第 2 号，97-109.
4）木村宣孝・菊池一文（2011）特別支援教育におけるキャリア教育の意義と知的障害のある児童生徒の「キャリアプランニング・マトリックス（試案）」作成の経緯．国立特別支援教育総合研究所研究紀要，第 38 巻，3-17.
5）国立教育政策研究所　生徒指導・進路指導研究センター編（2023）学びをつなぐ！「キャリア・パスポート」．光村図書.
6）国立特別支援教育総合研究所（2008）知的障害者の確かな就労を実現するための指導内容・方法に関する研究．報告書.
7）前川久男（2013）第 1 章 発達障害のアセスメントとその目的．梅永雄二・中山健編 発達障害の理解と支援のためのアセスメント．日本文化科学社.
8）文部科学省（2005）特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）.
9）文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説（平成 29 年告示）.
10）文部科学省（2017）中学校学習指導要領解説（平成 29 年告示）.
11）文部科学省（2018）高等学校学習指導要領解説（平成 30 年告示）.
12）文部科学省（2018）特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）.
13）文部科学省（2023）中学校・高等学校キャリア教育の手引き.
14）小畠崇史・和田尚子・花田栄子・樋口陽子・中山健（2020）北九州 DN-CAS 研究会の取り組みと実践．福岡教育大学教育総合研究所附属特別支援教育センター研究紀要，第 12 号，23-34.
15）尾崎祐三・菊地一文監修（2013）知的障害特別支援学校のキャリア教育の手引き 実践編．ジアース教育新社.
16）上岡一世監修・納富恵子編著（2009）自閉症の基本障害の理解とその支援・対応法．明治図書.
17）梅永雄二（2011）発達障害の人への就労支援．LD 研究，第 20 巻，第 3 号，259-266.

○倫理的配慮

これまで，TUBASA さんの検査結果の報告や必要な支援について，保護者の了解を得て第一筆者は第二筆者に相談し，助言を受けて実際の支援に生かしてきた。本研究においても，保護者，本人に対して，研究の概要，インタビューの実施，研究成果の公開，個人情報の保護について説明を行い，了解を得た。